戦争―そして別れ

旭区支部　小熊　紀久子（子）
戦没者　中西　博
戦没地　フィリピン

父が戦死してから、私は祖母達に育てられました。母のことは、何も聞かされず写真さえもありませんでした。何故、母がいないのかさえ気になることは一度もなかったと思います。それだけ、祖母達に大事に育てられ幸せな毎日を送っていました。

母が亡くなってから本当のことを知り、母の悲しさ、淋しさ、悔しさを始めて知ることが出来ました。私も本当のことをもっと早く知っていたら、母にあんな冷たい言葉を口にしたりしなかったろうにと、戦争さえなかったら幸せな家庭だったのにと悲しくてなりません。

私に子供が出来てから、夏休みには必ず母の所に遊びに行く様になりました。館山の海が目の前であり、横浜育ちの私達にとってはとっても楽しいものでした。海もきれいで唯ひたすら遊び、母の手伝いなど何もせず、別荘みたいなものでした。ある時、母が、祖母に苛められて辛かったとポロッとこぼしました。私にはとても優しい祖母ですから「何で、私にそんなことを言うの！そんな話は聞きたくないわ。おばあちゃんがお母さんのこと苛めたりする訳なんてないでしょう。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

もう帰る。来年からはもう来ないからネ」と強い口調で言い返していました。でも、翌年もその次の年も、夏休みには母のところに遊びに行きました。そして、決まって祖母のことで母と言い争いになります。「おばあちゃんのこと、もう、これ以上とやかく言わないで、お母さんよりおばあちゃんの方が好き」

そして、「あなたは私を置いて出て行った人でしょう、産みの親より育ての親と言う言葉だってあるでしょう。あなたに逢ったのが間違いだった。もう二度とここには来ないから」とまで、母に厳しい言葉を投げ掛けました。その時の母の淋しそうな顔が忘れられません。真実を知らなかったとは言え、本当に酷いことを言ってしまったものですが、謝ることも忘れ、母とも疎遠になっていました。

そして、年末の十二月三十日の午前三時半頃だったと記憶していますが、電話が鳴りました。こんな時間に誰からだろうと電話に出ると、館山の叔母さんから「きっ子ちゃん、驚かないでね、お母さんが大変だから直ぐに来て」と言う電話でした。母の所に、急いで向かいましたが間に合いませんでした。

そして、母のことを叔母さんから初めて聞かされました。「お母さんと野毛のおばあちゃんとのことは、きっ子ちゃんは何も知らなかったでしょうが、あなたのお父さんが戦死しことが判った時、きっ子ちゃんだけは渡さないからと、おばあちゃんに言われて、お母さんは実家に帰されたのよ。でも、こっちの実家でも出戻りだと皆には冷たくされて、物置小屋をあてがわれて、豆だけしか食糧も分けてもらえなかったそうよ。でも、いつかきっと、きっ子ちゃんに会えると歯

©2011_財団法人神奈川県遺族会

を食いしばって頑張ってここ迄来たことは知らなかったでしょう。」
初めて聞く話に、お母さん、ごめんなさいと何べん言っても、母にはもう届きません。
お母さん、本当にゴメンナサイ。黄泉の国でお父さんとは、もう会えましたか?。
この前、お父さんの戦死した地、ミンダナオ島に行って来ました。館山の海と同じ様なきれいな海に浸かって来ました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会